

## 喜劇映画における独裁者ヒトラーの表象 —チャップリンの『独裁者』とデヴィッド・ヴェンドの 『帰って来たヒトラー』—

五十嵐 由香\*

### はじめに

ヒトラーを扱った喜劇映画といえば、真っ先にチャールズ・チャップリンの『独裁者』(*The Great Dictator*, 1940)<sup>1</sup>を思い浮かべる人が多いであろう。ヒトラー率いるナチスドイツがフランスに侵攻する中、ナチスによる妨害、英国、アメリカ本国からの映画製作に対する圧力にも負けず、この映画は公開された。<sup>2</sup>チャップリンは架空の国トメイニアの独裁者ヒンケルとユダヤ人の床屋のふた役を演じた。ヒンケルはヒトラーそっくりに、床屋はチャップリンがそれまで製作してきたサイレント映画のキャラクター放浪者チャーリーを彷彿させる人物として演じた。

その75年後、ドイツで『帰って来たヒトラー』(*Er ist wieder da*, dir. David Wnendt, 2015)<sup>3</sup>という喜劇映画が誕生した。題名の通り、死んだはずのヒトラーが現代によみがえるという映画である。同名の原作本もこの映画も、ヒトラーを扱うことはいまだタブーとみなされるドイツ本国のみならず、世界中でヒットした。

それぞれの作品で独裁者ヒトラーはどのように描かれているのだろうか。1940年のテレビやインターネットがまだ普及していない時代と、現在とではその表象の仕方はどう違うのか。上にあげた二つの喜劇映画の中で笑いの対象としてヒトラーがどのように表象されているか比較する。

### 1. チャップリンの『独裁者』

1930年代の映画界は、サイレント映画からトーキー映画への過渡期である。最初のトーキー『ジャズ・シンガー』(*The Jazz Singer*, dir. Alan Crosland, 1927)の公開後、ハリウッドではトーキー映画の製作数が増えていった。チャップリンは映画界のこうした動向にゆっくりと歩調を合わせた。1931年には、チャップリンが‘a nondialogue but synchronized film’<sup>4</sup>(音声会話は無いが音のある映画)と自ら称した『街の灯』(*City Lights*)を製作し、1936年には映画の中で放浪者チャーリーが‘Titina’(ティティナ)をイタリア語、フランス語、スペイン語などが混在するような音声言語で歌う『モダ

---

\* 人間科学総合研究所客員研究員

ン・タイムズ』(Modern Times)を製作する。<sup>5</sup>チャップリンは次に作る映画をトーキー映画にするか思案していた。<sup>6</sup>またヒトラーが台頭し戦争の気配が忍び寄る時に、ロマンスを題材にしただけの映画は作れないとも感じていた。<sup>7</sup>そこで思いついたのが『独裁者』である。

一九三七年に、わたしはアレグザンダー・コルダ(イギリスの映画プロデューサー。一八九三―[一九五六])からある提案を受けた。まずヒトラーがわたしの放浪者と同じチョビひげをはやし、そうしたことから人ちがいが起こるというテーマで、ひとつヒトラーの話しを映画にしてみないか、というのである。[中略] そのうち、突然あるアイデアがひらめいた。これだ! ヒトラーに扮したわたしが、大衆相手にわけのわからぬ長広舌をふるって思う存分にしゃべりまくる。そして浮浪者のわたしは、あまり口をきかないでおればよい。ヒトラー・テーマは、パレスク[滑稽なものまね]とパントマイムを両立させる絶好のチャンスだ。<sup>8</sup>

このアイデアがそのまま『独裁者』に投影されている。映画の冒頭、「独裁者ヒンケルとユダヤ人の床屋が似ているのは一まったく偶然である」という字幕がはいる。この映画は、トメイニア国の独裁者ヒンケル(チャップリン)を中心とした「People of the Palace(宮殿の人々)」と、ユダヤ人の床屋(チャップリン二役)を中心とする「People of the Ghetto(ユダヤ人街ゲッターに住む人々)」に分けられている。この二つの背景を結びつける役割を果たすのが、シュルツという宮殿側の陸軍指揮官である。

映画の舞台は1918年、第一次世界大戦の真っ只中に始まる。一兵卒の床屋が負傷した陸軍指揮官シュルツを助け軍機と一緒に乗り込むが墜落し、床屋は病院に運ばれる。トメイニアは敗戦し、数年が過ぎる。床屋は記憶喪失のまま、病院を抜け出しゲッターに帰ってくる。その間にトメイニアの総統となった独裁者ヒンケルは、集会を開いてトメイニア語(ヒトラーのドイツ語のように聞こえる)<sup>9</sup>で演説をする。

一方、ゲッターでは、突撃隊によるユダヤ人への暴力が横行している。ある時シュルツがゲッターの巡視に来て、突撃隊と争い街灯につるしあげられている男を見つける。その男が大戦の時に命を助けてくれた床屋だと気づき、今度はシュルツが床屋を助ける。しばらく平穏な時が過ぎるが、ユダヤ人の高利貸しがヒンケルに所望されたお金を貸さなかったことに腹を立て、ヒンケルはさらなるユダヤ人迫害を決める。床屋の店は爆破され、家主たちとオスタリッチ国に亡命しようとする。同じ頃宮殿では、シュルツがヒンケルに対してユダヤ人への迫害を止めるように忠言し、ヒンケルの不興を買って収容所送りにされてしまう。そして彼は、護送途中で脱走しゲッターへ逃げ込む。床屋たちは、彼をかくまうが逆にヒンケルを暗殺するため宮殿爆破の実行者をゲッターの住人から選ぶように促される。しかし結局、シュルツの居場所が突撃隊に見つかり、彼と床屋は収容所へ送られてしまう。しばらくして二人は、士官の服を盗み収容所からの脱出を謀る。同じころオスタリッチ侵攻の作戦で鴨撃ちしながら待ち伏せしていたヒンケルが軍服を着ていないために、逃げた床屋と間違えられ捕まっ

てしまう。一方、軍服を着ている床屋はヒンケルだと勘違いされ、シュルツとともに、征服されたオスタリッチの群衆が大勢集まっている集会場に連れて行かれる。床屋は、ヒンケルの座るべき高段に案内される。内相兼宣伝相ガービッチがユダヤ人は国家の敵であるという演説をし、「未来の世界君主！」と床屋に向かって演説を促す。床屋は「ダメです」とシュルツにささやく。シュルツは、「他に助かる望みはない」と答える。これに対して、「望み」とつぶやき、ゆっくりと椅子から立ち上がり演壇に行き、「申し訳ない 私は皇帝になりたくない」で始まる六分間の演説をするのである。<sup>10</sup>

チャップリンは「What People Laugh At (人は何を笑うか)」(1918)<sup>11</sup>という記事の中で、初期のサイレント映画に見られる警官のドタバタ喜劇を例に、笑いが起こる原理をこう説明している：「時には横柄な態度で威張っている警官が、[石炭投入口に落ちたり、しっくいに入ったバケツに突っ込んだり、パトロールの車から落ちたりして]滑稽で威厳のない状況に陥る。そのみじめな光景が、一般市民に起こった場合よりも倍面白いと思わせる。」<sup>12</sup>宮殿において、ヒンケルがトラブルに巻き込まれそれでも威厳を保とうとする一連の場面にチャップリンのこの考えが反映されている。演説をして退場するヒンケルはヘリング元帥に押され階段を転げ落ち、激怒してトメイニア語でヘリングにまくしたてる。そして言い訳をするヘリングもトメイニア語で英語の「バナナ」と聞きとれる語を連発し、ヒンケルの怒りをかう。ヒンケルが秘書に口述タイピングをさせる場面では、ヒンケルの話すトメイニア語の長さや秘書のタイプしている文字の量が合わず、彼をいらつかせ笑いを誘う。イタリアの独裁者ムッソリーニを想起させる人物であるバクテリア国のナパロニが登場し、この二人の独裁者たちの引き起こす場面は絶妙でさらに滑稽である。二人は隣国オスタリッチ侵攻をめぐって牽制し合うのだが、自分を相手よりも格上に見せようと画策する。ヒンケルがナパロニを自分専用の床屋に連れて行き、そこで椅子の高さを手回して調節して自分の方を高く見せようとするのだが、上げ過ぎて天井に頭をぶつけてしまうのである。また、ヒンケルとナパロニが側近だけを連れて、食事をしながらオスタリッチ侵攻の密約をする場面では、パンにマスタードを塗り過ぎてどちらも話ができないほど辛さで転げまわる。一国の独裁者である人物が「滑稽で威厳のない状況」に陥るこうした場面は、胸がすくような笑いを起こす演出になっている。

独裁者の発するトメイニア語が、ゲッター側の人々に意味を伝えるのではなく恐怖を与えるものだというのもこの映画では重要な点である。トメイニア語を話すのは、ヒンケルだけで、前述の通りヘリングがヒンケルとの会話で少し話すだけである。レニ・リーフェンシュタールの映画『意志の勝利』(*Triumph des Willens*, 1935)<sup>13</sup>に出てくる、全国党大会に集まった群衆をそっくり写したと思われる場面で、ヒンケルはトメイニア語で派手な身振りを交えて演説する。よくみると、ナチス式敬礼をしている群衆はハリボテである。そこにパリのラジオ放送局が英語の訳を付けながら中継している、というナレーションが入る。身振りやトメイニア語のおかしな音と英訳のちぐはぐな様子、群衆が機械で動いているというおかしさ。それによって映画を観る者の目には独裁者の吐く言葉が意味を持たない音として映るのである。またヒンケルがさらなるユダヤ人迫害をラジオで宣言する場面では、ラジオを通じてゲッターにヒンケルのトメイニア語が響いたとたん、それまで平穩に過ごしてい

た表通りの人々の表情が恐怖へと一変し、家に逃げ帰って誰もいなくなる。ヒンケルの発するトメイニア語は音でしかないのだが、ヒンケルの言葉に人々は恐怖を感じていることが伝わってくる。

このように宮殿のヒンケルはこの映画の登場人物の中で最も権力を有し、恐怖を与える人物として表象されているが、同時に非常に滑稽で愚かである。

一方、床屋の住むゲッターの場面で起こる笑いは、サイレント映画の放浪者チャーリーが引き起こす笑いと同じである。チャップリンは、「警官役はいつも巨体で動きの鈍い人を選んで、私はその股の間をくぐったりして、すばしっこく軽やかに見せる。私がひどい目に合う場面では、相手役は必ず大男だ。大男と小さい私の対比によって観客は私に同情する」と述べている。<sup>14</sup> この警官とチャーリーの格闘で起こる笑いは床屋が突撃隊と繰り広げるドタバタのところで見られる。突撃隊がペンキを頭からかぶったりフライパンで殴られる場面では胸がすくような笑いを引き起こし、床屋に対する突撃隊の仕打ちに観客は滑稽さを感じるとともに同情を寄せるであろう。またラジオから流れるブラームスの「ハンガリー舞曲第五番」に合わせて客のひげを剃る場面、シュルツのゴルフバッグや鞆を持って目隠しされた状態で屋根伝いに歩く場面など、滑稽さに加えてパントマイムの妙演技が織りなす場面がある。そしてゲッターの人間味あふれる背景がヒンケルの宮殿とは対比されるのである。心優しく、勇敢で正直者のジェケル氏、臆病なマン氏、働き者で明るいハンナなど血の通った人々との場面を通し、ゲッターでは床屋に向けられる笑いは同情をも誘う。

独裁者が君臨する宮殿、人情に厚いゲッター、対照的な二つの背景により、独裁者に向けられる嘲笑と床屋に向けられる同情をともなう笑いは違う性質の笑いとして区別できるのである。

## 2. デヴィッド・ヴェンドの『帰って来たヒトラー』

この作品はティメール・ヴェルメシュの『帰って来たヒトラー』が原作で、デヴィッド・ヴェンド監督により2015年にドイツで映画化され、日本では2016年に公開された。「ヒトラー礼讃が禁止されている」ドイツにおいて、2012年に発売された原作本はベストセラーとなり、2015年には劇場上演、さらに映画化され、大ヒットとなった。<sup>15</sup>

簡単にあらすじを追うと、1945年に自殺したヒトラーが、2014年のベルリンにタイムスリップし、記憶喪失の状態ですき地で目覚める。総統地下壕に戻ろうとさ迷っているところを売店の店主に助けられ、自分が2014年のベルリンにタイムスリップしたことを自覚する。店主は彼をヒトラー専門のものまね役者だと勘違いし、売店に寝泊りさせる。同じ頃、青年ザヴァツキは、持ち込む企画が面白くないという理由でマイTVというテレビ局から解雇される。自宅で彼は、貧困に苦しむ子供を撮影した自分のビデオを悲嘆にくれながら見直していた。その時母親が励ましに来て、映像の中にヒトラーが映っているのを見つける。ベルリンにヒトラーが出現。これは特ダネになると確信しヒトラーを捜しに出かける。ザヴァツキは売店でヒトラーに会い、テレビの番組を作り売り出そうと取材旅行に誘う。ヒトラーも政界復帰の手掛かりになると思い同意する。二人はドイツ中を廻り、一般市民から政治や社会に対する不満を聴いて歩く。ザヴァツキが撮影した映像をもって、マイTVに売り

込みに行く。編成局長がベリーニ女史に替わったばかりの局会議に現れたヒトラーは、彼女に気に入られ、テレビに出ることになる。とんとん拍子で自分の居場所を獲得してゆくヒトラーは局内でザヴァツキの恋人のクレマイヤー嬢からパソコンの使い方をならい、1940年代にはなかったインターネットという新しいメディアが世界征服の戦略に役立つと確信する。その後ユーチューブ（YouTube）で話題になったヒトラーは、次々と番組に出演し人気者になる。そんな中、局長の座を目論んでいた副局長ゼンゼンプリングは、何とかしてヒトラーが出演する番組が増えるのを阻止しようと画策する。ザヴァツキの撮った映像の中に、ヒトラーが犬を射殺した場面を偶然見つけ番組で放送すると、テレビ局に非難や抗議が殺到しベリーニ局長もヒトラーも解雇となる。行き場を失ったヒトラーをザヴァツキは実家に連れて行き、そこでヒトラーは自伝『帰って来たヒトラー』を執筆する。ザヴァツキはヒトラーの原稿を持ってベリーニ女史に会い、本として出版され映画化する時は自分が監督することを条件に原稿を託す。本は出版され、大ヒットとなり、ザヴァツキにより映画の撮影も始まる。一方、マイTVで新局長になったゼンゼンプリングは、ヒトラーが出演しなくなった番組の視聴率が伸びず窮地に陥り、ザヴァツキに映画の放映権が欲しいと頼み込む。ある晩、ザヴァツキとヒトラーはクレマイヤー嬢の家に招待される。アルツハイマー型認知症を患っている彼女の祖母がヒトラーの声を聞き、その顔を見るなり、「あんたが私の家族をガス室で殺したんだ」と言いだし、激しい剣幕でヒトラーに詰め寄る。その帰りの車の中で、クレマイヤー嬢がユダヤ人であることを「ひどい話だ」と言うヒトラーを見て、ザヴァツキは違和感を覚える。そんな中ヒトラーはネオナチに襲われ入院する。ザヴァツキは自宅でヒトラーが出現した時の映像を詳しく調べる。そこには煙をあげて立ちあがるヒトラーが映っている。急いでその空き地へ行って調べると、辺りには焼け焦げた葉っぱがあり、建物には総統地下壕跡と書かれている。ヒトラーが本物であると悟ったザヴァツキは彼が入院している病院へ急ぐ。ヒトラーはすでに退院した後で、ベリーニ女史が病室の後片づけをしている。ザヴァツキは彼女に詰め寄り、実はヒトラーは本物でこのままにしておいては危険だから今すぐ撮影を止めるようにと言うが、彼の方が異常を来たしたと思われ、病院に拘束されてしまう。映画の撮影はいよいよ佳境をむかえ、皮肉にも、銃をもったザヴァツキ役がヒトラーにビルから飛び降りるよう迫るシーンである。「私を撃てるか？」ザヴァツキ役は撃ちヒトラーはビルから落ちる。が、落ちたはずの死体はなく、ザヴァツキ役の後ろにヒトラーが再び現れる。「私からは逃れられん。私は人々の一部なのだ。よいこともあった。」ヒトラーのこの台詞で撮影は完了する。「彼は帰って来た」という主題歌が流れる中、ヒトラーとベリーニ女史の乗るオープンカーがパレードのように街を過ぎて映画は終わる。

この映画においてもチャップリンの『独裁者』のように二つの背景が存在する。一つは、2014年という現在、もう一つは、ヒトラーが持ち込んだ過去である。そして現在と過去との隔たりに存在するヒトラーの言動に向けて笑いが生じる。例えば、ヒトラーとザヴァツキが初めて会った場面で、ヒトラーがポーランド征服をどのように行うか質問し答えられないザヴァツキに「ザヴァツキ將軍にポーランドは任せられん それどころか自分専用の軍服すらない 私は自分の軍服を把握しておる

今は洗濯屋だ」と答えて、ザヴァツキを笑わせる。これを持ちネタだと思ったザヴァツキはその「プログラム」(出し物)は用意していたものかと問い、ヒトラーは「プログラム」(綱領)は、6月から考えていたと答える。別の場面でヒトラーは、コート掛だと思ったものが「テレビ受像機」だとわかり、科学の進歩に驚嘆し「プロパガンダに最適だ」と言い、テレビの番組が料理や面白味のないドラマしかないことに、「ゲッベルスには見せられん」と今度は憤慨する。ヒトラー自身がテレビに出演することとなり、ペリーニ女史から「いいわね?ユダヤ人ネタは笑えない」と、くぎを刺された時も、「ああ 笑いごとじゃない」と真顔で返答する。ヒトラーが話す言葉を他の登場人物達は現在の言葉の意味で受け止めながら会話が進む。そこに齟齬が生じているのに、気づいていないヒトラーと登場人物達に対して笑いが生じるのである。

また、この映画では、ヒトラーがドイツ中を廻り一般人と交流するというドキュメンタリーを一部挿入し、ヒトラーと会話をする人達の反応を見ることができる。フィクションとの混合によってどの人が一般人でどの人が役者かは見分けにくい、現在のドイツ国内におけるヒトラーに対する複雑な感情が見える瞬間でもある。<sup>16</sup> ヒトラー演じるオリヴァー・マスッチは、入念なメーキャップと軍服でヒトラーそっくりに仕上がっている。チャップリンの様な誇張したコミカルな演技はしていない。一般人と交流した時はむしろ、「過剰に演技しなくてもヒトラーというキャラには彼らの方から反応する 僕は人々の悩みを聞く父のように接した 決して隠さなかったのはヒトラーが過去を繰り返そうとしていることだ」と話している。<sup>17</sup> 現在によみがえったヒトラーは「収容所の件は私に任せてくれ」と言ったり、犬の混血にたとえて種の消滅が起きているという話しをしたり、ナチ時代と変わらぬ思想をもった独裁者として表象されている。ヒトラーを見て嫌悪感をあらわにする人、歴史から学び過去の過ちを繰り返してはいけないと説く人、ヒトラーが選挙に立てば投票すると言う人など、現在の人々の反応に観客は笑い、そしてその独裁者の話しに同調する人達が現れると不安や違和感が沸き起こる。マスッチの言う「過去を繰り返そうとしている」ヒトラーを認識することで、観客の笑いは恐怖に変わるのだ。クレマイヤー嬢の祖母が激昂する場面を境にヒトラーは恐怖を与える存在として強く印象づけられる。アルツハイマー型認知症を患っている祖母は、「あんたが私の家族をガス室で殺したんだ 昔と同じだね 同じことを言ってるみんな最初は笑ってた だまされないよ 忘れてない 出てけこの極悪人め」と登場人物の中で唯一本質を見抜いたことを言う。本物のヒトラーを知っている祖母の反応が、ザヴァツキを動かし結果的にヒトラーを本物と認識させる。ナチスが支配をしたドイツでも、「みんな最初は笑って」長続きはしないと思われていたヒトラーが、気がつくと権力の全てを掌握し、ナチ体制の本質を見抜いて批判する人々を収容所に送ったり亡命へと追いやった。映画の中では、ザヴァツキが本物と見破るが病院に閉じ込められる。

1933年当時、大衆が煽動されたわけではない  
彼らは計画を明示した者を指導者に選んだ  
私を選んだのだ

なら怪物を選んだものを責めるんだな  
 選んだ者たちは普通の人間だ  
 優れた人物を選んで一 国の命運を託したのさ  
 どうする？選挙を禁止するか？ 一中略—  
 なぜ人々が私に従うか考えたことはあるか？  
 彼らの本質は私と同じだ 価値観も同じ 私を撃てるか？  
 私から逃れられん 私は人々の一部なのだ よいこともあった

ヒトラーが、撮影している自伝の映画の中でザヴァツキ役に銃を突きつけられ自死を促されながら言う台詞である。最後は銃で撃たれても死なず、またよみがえり毒を吐く怪物と化している。現在という背景に過去を持ちこんだヒトラーは、始めのうちは存在そのものが笑いの対象であった。ところが、現在に溶け込みその存在が周りの人物達を巻き込みながら増大し、過去を暴く者達がいなければ、笑いの対象から恐怖の対象へと変化を遂げるのである。

映画を撮り終えたヒトラーとベリーニ女史が車に乗り込んだところをマスコミに囲まれ、「本物が現れたら歴史は繰り返すと？」と質問され、ベリーニ女史は、「戦後70年間—歴史教育をしてきて子供たちも飽きてるわ もっと信頼しなきゃ」と答える。まるで彼女の役割はプロパガンダを駆使してヒトラーを陰で支えるナチス宣伝相のゲッベルスと同じである。いつの間にかヒトラーは、現在という背景においてテレビ、インターネット、出版、映画といったメディアを支配する独裁者となっているのだ。

### 3. 結び

ヒトラーが存在した同じ時代に、目の前の脅威に立ち向かうためチャップリンは『独裁者』を製作した。架空の国としながらも当時の現実を映す背景において、支配する側と、非人道的な扱いを受け支配される側の二つの世界をつくり、それぞれちがう性質の笑いをもたらすことで、独裁者を滑稽な存在として表象した。1933年ドイツからの亡命を余儀なくされたトーマス・マンが自身の日記にヒトラーの演説を軽蔑する文章を書いている：「この男〔ヒトラー〕が、「ドイツ文化」について不器用にたえず同じことを反復し、しじゅう脱線しながら、貧弱きわまるドイツ語で次々と繰り返して行く思いつきは、頼るべき指導者もないまま一人で頑張っている低学年児童のそれだ。」<sup>18</sup> この記述は、『独裁者』におけるヒンケルの演説の様子を想起させる。チャップリンの自伝には、マンの名前が何度か出てくる。同時代人の視点によるヒトラーの表象が『独裁者』の中で嘲笑を買う独裁者ヒンケルとして描かれているのだろう。

一方、「ヒトラーは究極のタブー」<sup>19</sup>である現在のドイツで製作された『帰って来たヒトラー』は、現在に放り込まれたヒトラーそのものが滑稽な存在として始めは表象されている。ヒトラーが台頭した時代を実際に経験した人々が少なくなっている現在において、ヒトラーはその本質が分からないタ

ブーとなりうる。2015年の作品である『帰って来たヒトラー』の中では世界征服を目論むヒトラーは滑稽に映るが、ヒトラーによって迫害された同時代人の視点で見れば、祖母が叫ぶ台詞がいうように「極悪人」であろう。この両方の視点からヒトラーを表象することで、この映画は単なる喜劇では終わらない重厚な作品となっている。飯田道子は『ナチスと映画』において、ヒトラー像を現在の視点からみた記憶の系譜としてとらえ、2008年まで製作されたヒトラーとナチスを題材にした映画を紹介している。チャップリンの『独裁者』を「『笑い』を扱ったナチ映画として特異の位置にある」<sup>20</sup>とし、ヒトラーを笑いの対象にするのは難しく限界があると判断している。1960年代末以降70年代の映像におけるヒトラーとナチスの表象は、「美しく魅力的」<sup>21</sup>なものとして描かれるようになる。それまでの「戦争映画の悪役という定番」<sup>22</sup>から、制服や粛清の美などというものを描こうとする映画に使われるというのである。80年代から90年代にはいわゆる「ホロコースト映画」<sup>23</sup>が製作されるようになり、反ユダヤ人政策や強制収容所の実体に焦点が当てられヒトラーやナチスの表象は背景へと移行する。21世紀に入り、当時のヒトラーを知る人物の証言や当時のニュース映像をもとにヒトラーは「狂気の独裁者から、さまざまな面を持つ人間」<sup>24</sup>として描かれるようになる。そして「ヒトラーとナチスの表象は形を変えながら映像化され続け、今後もそれは続いていくだろう」<sup>25</sup>と飯田はむすんでいる。2015年『帰って来たヒトラー』はそれまで難しいとされてきた笑いの対象にヒトラーを置き、滑稽なヒトラーを描いた原点である『独裁者』に回帰したといえるだろう。時代の風潮とヒトラーの表象は大いに関係があり、現在と『独裁者』が製作された時代のありさまが似てきているのかもしれない。

## 注

- 1 『The Great Dictator 独裁者』チャールズ・チャップリン メモリアル・エディション DVD 角川書店、2011年 日本語字幕 清水俊二 以下、この映画の字幕はこのDVDによるものである。
- 2 チャールズ・チャップリン、中野好夫訳 『チャップリン自伝』（新潮社、1966年）（以下『自伝』）459、472ページ。さらに詳しいことが、大野裕之『チャップリンとヒトラー メディアとイメージの世界大戦』（岩波書店、2015年）（以下『チャップリンとヒトラー』）120-8頁にある。
- 3 『帰って来たヒトラー』映像特典付きDVD ギャガ、2017年 字幕翻訳 吉川美奈子 以下、この映画の台詞はこのDVDによるものである。
- 4 部分的に話している場面や歌うシーンに音を合わせているが、言葉としては判別できない。
- 5 Donald W. McCaffrey ed. *Focus on Chaplin* (Spectrum, 1971), 63頁。チャップリンがサイレント映画を作り続けていた理由は、ひとつにはパントマイムの表現が最も喜劇に適していると考えたからで、もう一つには、トーキー映画は使用言語を英語などと特定のものに限定しなければならず、パントマイムのように世界中の人が見て理解できるという普遍性がなくなってしまうと考えたからである。五十嵐「Charles Chaplinの『独裁者』における芸術、政治、そしてヒューマニズム」37-9頁も参照。
- 6 『自伝』452-3頁。
- 7 『自伝』457頁。



- 8 『自伝』457-8頁、[ ]は筆者が加筆。
- 9 『チャップリンとヒトラー』 図 著作権 所蔵元 出典 2-5頁にフーマン・メーランらによるドイツ語の発音から類推した「ヒンケルのデタラメ・ドイツ語解説」がある。
- 10 『自伝』473ページに全文掲載あり。
- 11 Donald W. McCaffrey ed. *Focus on Chaplin* (Spectrum, 1971), 48-54頁。*American Magazine* 86 (November 1918), 134-7頁に掲載された記事の抜粋である。
- 12 同上、48頁。“Here were men representing the dignity of the law, often sight of their pompous themselves, being made ridiculous and undignified. The sight of their misfortunes at once struck the public funny bone twice as hard as if private citizens were going through like experience.”
- 13 1934年にニュルンベルクで行われたナチ党大会の記録映画。岩崎昶『ヒトラーと映画』（朝日選書、1975年）123-9頁、飯田道子『ナチスと映画』（中公新書、2008年）55-74頁参照。
- 14 *Focus on Chaplin*, 51: “If I am being chased by a policeman, I always make the policeman seem heavy and clumsy while, by crawling through his legs, I appear light and acrobatic. If I am being treated harshly, it is always a big man who is doing it ; so that, by the contrast between big and little, I get the sympathy of the audience [.]”
- 15 森内薫「解説」、ティムール・ヴェルメシユ、森内薫訳 『帰って来たヒトラー 下』（河出文庫、2016年）282-4頁。
- 16 DVD特典映像メイキングの中で、監督であるデヴィッド・ヴェンドは、今の社会と関連付けた作品を描くために一般の人々とヒトラーを交流させたと述べている。
- 17 DVD特典映像オリヴァー・マスッチ 来日インタビューより。
- 18 トーマス・マン、岩田行一 浜川祥枝 森川俊夫訳『トーマス・マン日記 1933-1934』（紀伊國屋書店、1985年）184頁。岩崎昶は『ヒトラーと映画』286頁でマンの日記に言及しているがページについては不明。また、ラジオ放送を聞いて日記に書きいれたと岩崎は記述しているが、マンの日記の該当箇所にはナチ系新聞に載っていた演説を読んだことになっている。
- 19 『帰って来たヒトラー 下』280頁。
- 20 『ナチスと映画』147頁。
- 21 同上、161頁。『地獄に堕ちた勇者ども』（*La caduta degli dei*, dir. Luchino Visconti, 1969）が例として挙げられている。
- 22 同上。
- 23 同上、177頁。『シンドラーのリスト』（*Schindler's List*, dir. Steven Spielberg, 1993）や『ライフ・イズ・ビューティフル』（*La Vita e belle*, dir. Roberto Benigni, 1998）などが例として挙げられる。
- 24 同上、203頁。『ヒトラー～最期の12日間～』（*Der Untergang*, dir. Oliver Hirschbiegel, 2004）はヨアヒム・クレメンス・フェストによる同名の著書『ヒトラー 最期の12日間』（鈴木直訳、岩波書店、2005年）とヒトラーの個人秘書官だったトラウデル・ユングの証言と回想録『私はヒトラーの秘書だった』（足立ラーベ加代 高島市子訳、草思社、2004年）をもとに製作された。
- 25 同上、223頁。

## 参考文献

飯田道子（2008）『ナチスと映画』中公新書

- 五十嵐由香 (1998) 「Charles Chaplin の『独裁者』における芸術、政治、そしてヒューマニズム」『北海道英語英文学』第43号、37-46頁
- 岩崎昶 (1975) 『ヒトラーと映画』朝日選書
- ヴェルメシユ、ティムール著 森内薫訳 (2016) 『帰って来たヒトラー 上・下』河出文庫
- 大野裕之 (2015) 『チャップリンとヒトラー メディアとイメージの世界大戦』岩波書店
- チャップリン、チャールズ著 中野好夫訳 (1966) 『チャップリン自伝』新潮社
- マン、トーマス著 岩田行一 浜川祥枝 森川俊夫訳 (1985) 『トーマス・マン日記 1933-1934』紀伊國屋書店
- McCaffrey, Donald W. Ed. (1971) *Focus on Chaplin*, New Jersey : Spectrum.

## 【Abstract】

Representing the Dictator in *The Great Dictator* and *Look Who's Back*

Yuka IGARASHI\*

Upon release, a comedy film presenting Adolf Hitler in the leading role, *Look Who's Back* (*Er ist wieder da*, dir. David Wnendt, 2015), caused a worldwide sensation. The idea of featuring Hitler as a comic figure is immediately associated with Charles Chaplin's *The Great Dictator* (1940) produced during the World War II.

While Hitler is the object of laughter, it appears that the comedic effect is induced more by the settings of each film. The goal of this paper is to examine the representation of Hitler in each film created in different periods in modern history and compare the ways in which they induce laughter.

**Key words** : Charles Chaplin, *The Great Dictator*, *Look Who's Back*, Adolf Hitler, comedy film

2015年にデヴィッド・ヴェンドが製作したドイツ映画『帰って来たヒトラー』は、タブー視されてきたヒトラーを喜劇映画の主人公にしたことにより、世界中で話題となった。この映画のワンカットにも挿入されているのだが、ヒトラーそっくりに、ドイツ語もどきの言葉を使って演説をする喜劇映画といえ、1940年のチャップリンの『独裁者』がすぐに思い浮かぶ。『独裁者』もまた、当時全盛期のヒトラーを扱った喜劇映画ということで公開前から話題となっていた。戦時と戦後という時代を隔てたこの二つの映画において、独裁者ヒトラーはどのように表象されているだろうか。本稿では、独裁者に対して起こる笑いが、映画に内在する二つの背景のコントラストから生じていることをそれぞれの映画の中を探りだし、笑いの中に見える独裁者の表象を比較する。  
キーワード：チャールズ・チャップリン、『独裁者』、『帰って来たヒトラー』、アドルフ・ヒトラー、喜劇映画

---

\* A visiting research fellow at the Institute of Human Science of Toyo University